

環境（自然）教育研修会 A 研修 第3回

日時：2016年7月9日 場所：フローラルガーデンよさみ

講師：名古屋市緑児童館長 日本冒険遊び場づくり協会地域運営委員 塚本 岳氏

はじめに

プレーパークでは、自由に木に登れます。火をおこして料理をしたり、びしょぬれや泥だらけもしょちゅう。地面に穴を掘ったり、のこぎりやかなづちを使って好きなものを作れます。プレーパークでの過ごし方は子どもの思いに任せているので、よほどのことがない限り、大人は見守り、指示や制限はしません。子どもたちの自由な遊びを守るために「プレーリーダー」という大人が常駐します。そして、この「禁止事項のない遊び場」が成り立つために、プレーパークは住民が中心となり、行政と話し合いながら運営しています。（てんぱくプレーパークHPより抜粋）

講義まとめ

✓子どもらしく生きられる環境を

・私たちの子ども時代のように「子どもらしく生きる」ことが難しい時代です。今の子どもたちに十分な「時間・空間・仲間」が用意されている社会ではありません。私たちが遊んで暮らした放課後は習い事や塾に、遊べる空き地や原っぱは制限ばかりの公園に変貌しました。名前も知らない友だちとの出会いすら今の子どもたちには少ないのです。ですが、子どもたちに「成長したい思いや力」が決して無いわけがありません。子どもたちが自発的に遊ぶことのできる環境を整えてあげたい思いからプレーパークを始めました。

・子どもは与えられた環境の中で育つのですが、私たちの子ども時代よりも何かと窮屈で自己を発揮できにくい社会になってしまいました。しかし、子どもたちの思いは発揮できにくくなっているだけで「大きくなりたい」と望む気持ちはあるはずです。今の社会を築いたのは私たち大人です。子どもたちのために大人ができることを考えてみましょう。

✓プレーパークの特性

・プレーパークはそんな子どもたちに「全力で放課後を楽しんでほしい」という思いがあります。また対象年齢は0～120歳と謳っています、どなたが参加してもかまいません。プレーパークでは個人が好きなように過ごせる場です。

・良い意味で子どもたちを放置します。若干のトラブルは子どもたち自身で解決させます。いじめにつながりそうな事象や、明らかに大怪我をしそうな場合以外は基本的に口を出しません。例えば「貸して」「やだよ」でもいいと思います。遊びを独占してもいつかは飽きますし、罪悪感が生まれます。そういったやり取りや自分で体験する機会を、なるべく大人が制止しない環境で子どもたちに経験させて自分で解決していくことが大事だと思います。

・怪我をすることを嫌がるのが大人ですが、小さな傷を重ねるからこそ大きな事故になりにくい

面も持ち合わせます。3歳で火起こしができる子もいます。見様見真似でノコギリに触れる2歳もいます。反対に高いところから飛び降りるのを怖がる中学生もいます。でも「できる方がいい」とは思いませんが、自分の身の丈に合った判断ができることのほうが大事だと思います。ですが、大人よりも経験が浅いのは事実ですし、先の先を読む力が弱いのも事実です。ですから、大人からみて明らかに大きな事故になる可能性がある遊び方には指示や制限をします。

・教育機関で無いからこそ子どもたちが自由にできるのが強みでもあります。幼稚園は保護者がいてこそ運営できるのですから、保護者が納得できる一定のルールや指針が無くてはいけないと思いますがプレーパークにはその縛りが無いのです。幼稚園のように国や市からの補助が出ないので運営としては厳しい面も持ち合わせますが、プレーパークに来る保護者からは極力援助を貰わないようにしています。プレーパークにいる子どもたち一人ひとりがパーソナルであり、親の収入で左右されない環境を作りたいからです。

✓大人が答えを与えない

・私たち大人は子どもに答えや正しいことをついつい与えてしまいます。ですが答えだけを与えられた子どもたちは「やり方」だけを身に着けてしまいます。それでは人の気持ちを労ることもできませんし、豊かな気持ちも育たないと思います。

・子どもは失敗から身につくものが多くあります。そして立ち直ろうとする力も持っているはずですが。何かと「失敗」を大人が嫌い、排除しようとする世の中ですが、挑戦しようとする子どもの心を信じて、その環境を必要以上に制限しないようにしています。

・良かれと思って声をかけたら、その子たちの遊びが終わってしまったなんていう経験は保育者でも経験があると思います。声かけは難しいですね。また、大人の一言で「自分たちで作上げた遊び」から「大人に言われて完成した遊び」に変わってしまうこともあると思います。無駄に足さない、マイナスの子育てを指針にしていますがなかなか難しいです。

✓遊びの中で人生を学べる環境を！

・「ズルイことをしてでも勝つ」「友だちを押しつけてまで自分を優先する」。けど、やりすぎると友だちに嫌われてしまう。そういった体験することも大事だと思います。またプレーパークでは年上や年下との付き合いも必然的にあり、その中で自分がどういったポジションに落ち着き、どう振る舞うべきなのかも自分で決めなくてははいけません。「年上なんだから我慢しなさい。」とは言われません。「どうしたいのか」「どうするべきか」は自分で決めていくのです。そういった経験から、自分でさじ加減を覚えていくのです。

・今の社会、子どもの小さなトラブルにも大人が割って入ったり、そうならないようにしたりしてしまいがちです。子どもにどこまで任せていいのかは私たち大人にも難しい問題です。しかし、子どもの頃に遊んで培ってきたものが私たちにはあると思います。どうすれば子どもが子どもらしく成長できるのかを考えることこそ、大人の役割だと思います。

✓遊びから自分に自信を持つ

・「これなら誰にも負けない！」と思えるものがあると、誰でも「もっと成長したい」「負けない

ぞ！」と思うはずですが。自信（プライド）があるからこそ突き詰めたいと思うのは大人も一緒だと思います。そういった経験の中から得られるものは大事なものだと思います。

・自分に自信が持てることが水切りだろうが缶ポックリだろうが虫探しでもかまわないと思います。大事なものは、私たち大人が「くだらないこと」「意味のないこと」だと否定しないことだと思います。大人も、自分が大事にしているものを他人に蔑ろにされたら怒れたり悲しくなったりしますよね？ 子ども同じだと思います。

・競争心を持てば、勝つために努力や工夫します。負ければ悔しさを受け入れて、次に勝つために反省や努力をしたり、相手を尊敬できたり、時には弱い相手に手加減できる心が芽生えたりと、子どもの意欲や心は育っていくはずですが。子どもが熱中できるものは遊びの中で出会うことが多いです。

✓子どものやることに答えはない、だが意味はある

・例えば絵の具を子どもに渡したとします。誰も何も言わなければ完成した物はグチャグチャなものでしょう。でも、それでいいのです。子どもは絵の具を「絵を描く道具」とも思っていないかもしれません。色の混ざり方や絵の具の感触…気になったのなら絵の具で好きに遊んでもいいと思うのです。「絵の具は絵を描く道具」という固定概念を持っているのは私たち大人なんですから。

・子どもの作ったものを作品としてみないことも大事です。子どもは「こんな風になった。」「こんな発見があった！」と見せにきているのかもしれませんが。子どもはよく、大人とは違う目線で物事を捉えます。大人で「上手い下手」だけかで判断するのはナンセンスですよ。

・「早く遊びなさい」「仲間に入れてもらいなさい」「せっかくだからやりなさい」と何となくの良かれを子どもに押し付けてしまいがちです。ですが遊びは無理にするものではないと思います。時には、友だちと一緒にいるのに電子ゲームで遊んでいても決して悪くはないと思うのです。大人にも友だちの家や秘密基地でマンガを読んで過ごした経験があると思います。私たちが言われた「マンガばかり読んで！」が「電子ゲームばかりやって！」に変わっただけで、何も変わらないですよ？ いつの子どもたちも居心地の良い場所でゆっくりしたいときもあるんです。

✓大人と子どもの関係性

・今は、子どもがあまり知らない大人と深く話すという機会も少ないです。大人の考えを知ることも子どもには大事なことです。プレーパーク内で時々、保護者に人生相談や恋愛相談を聞いてもらったなんて話も聞きます。また保護者の方も自分の子どもではないから言えることもあります。今の社会では希薄になった大人と子どものコミュニティがプレーパークには存在していると思います。

・プレーパークによって流行っている遊びは様々ですが、遊びが違うからどうだということはありません。そこでの関係や繋がりのおかげが遊びになっているのです。遊びを通して子どもたちが関わったり、大人と一緒に楽しく遊びする環境こそが大事なのです。

✓遊びとは？

「自分で考えること」

「自分でルールを作ること」

「トラブルを自分たちで乗り越えること」…

・子どもたちが遊んで育つ環境は大人の理由によって少なくなっています。子どもたちの「放課後の遊び時間」を「習い事や塾の時間」に変えてしまったのは、多くの大人が子どもに対して良かれと思った結果です。確かに学びは必要で大事なことです。でも、勉強しかできない大人ではいけませんよね。人として相手を思いやることや、関わり方、協調できる能力も必要です。私たちは知らないうちに遊びの中からそれらの多くを学んでいたと思います。

活動見学

講義後、プレーパークを体験。水遊びにピッタリの時期ですがあいにくの空模様。けれども、子どもたちは水遊びがしたい！ というわけで研修者も参加しましたが、研修者の想像を超える遊び方!!



雨が降っても子どもたちには関係ありません！



保護者の方も準備万端。



さあ、水のかけあいの始まりです！



子どもも大人も関係なし！



一気に水風船を作れる秘密兵器登場！



さすがプレーリーダー！序盤でびしょ濡れです。



自然に敵味方ができたり、時に裏切ったり…



大人だって本気で避けます！



もはや雨なんて関係ないです！



濡れたくない同士の水のかけ合い。



楽しんでしまえば皆いい笑顔です。



立場も関係ありません。油断するから悪いんです！

プレーパークを経験した上で質疑応答

Q.園でプレーパークに参加することはできるか？ 園回数 80 人程度、保育者は 10 人程度だが？

A.もちろん可能。園の環境によって、どこまで子どもたちを自由にさせるのかは違うので一概には言えないが、目新しいものが多いので保育者がきつといつも以上に大変だと思う。また今まで自由に遊んだことが無い子どもたちが解放されるパターンが一番怪我をしやすい。

またプレーパークでは大人も一緒に遊ぶことも普通なこと。子どもとの距離も縮まる。

Q.雨の日は室内で過ごすことが当たり前だった。普段は外に出ないが楽しかった。雨の日のプレーパークはどうしているのか？

A.「雨だー！」と室内に入ってくる子もいれば、逆に外に出かける子もいる。傘を持って散歩とかしたら楽しいと思う。

Q.怪我をした際の保護者への対応は？

A.行く場所は事前にチェックして、想像できる危険は取り除くようにはしている。また、子どもたちの安全確保に対しての勉強会をしたり現場にポイズンリムーバーを持って行ったり、子どもたちには長袖長ズボンで遊ぶ、くるぶしソックスは×…といった基本的な予防策は伝える。しかし、その上でも避けられない事故や怪我もある。起こってしまったことに対して迅速に対応することや親の理解もとても大事なことだ。

Q.事故や怪我を考えて遊びを制限するのか？

A.プレーパーク自体、預かって保育をする組織ではなく、また遊びも流動的なので幼稚園とは少し違うところもある。事故や怪我に明らかに繋がりそうな遊びの場合は制限をするが、子どもたちがお互いに助け合うことも多い。年上の子が年下の子に教える、そんな関係がどちらも成長させる。その関係が当たり前にある環境を大事にしたい。

Q.園でも焚き火でカレー作りをしたいが注意点は？

A.焚き火をしたい子、カレーを作りたい子に分ける。同じ作業だが目的が違う子どもが一つのことをすると怪我が起こりやすい。プレーパークでは炉は一つに制限しているが、料理をするときは焚き火用の炉と料理用の炉と二つ使っている。

・追記コメント

牧原：危ないからすぐに何でも排除という考え方はダメだと思う。

塚本：プレーパーク自体が公園を母体に行っているので焚き火をすることはなかなか難しい。土地を持っている幼稚園の強みだと思う。

牧原：宗教の火と教育のための火について規制は緩いのだが、やってはいけない風潮になりつつあるのが残念だ。

塚本：子ども自身が楽しいことを考えて遊ぶことが私たちのころにはできた。それが失われつつあるのが残念だ。

Q.声かけをする・しないの線引きの基準にしているものは？

A.枝があれば拾う、それが子どもなのだけど色々な理由で拾うなって止めてしまうのが今の社会。雑草は取ってもいいけど花壇の花は取ってはいけない。また花を取っていい環境もあれば取ってはいけない環境もある。良いか悪いか子どもたちには分かりにくいことだ。

ある時、プレーパークでザリガニをノコギリで切っていた子がいた。その場でどう声をかければいいのか迷った。いつか子どもにそれはいけないことだと気付いてほしいと思うし、周りの子どもが可哀相だと声をかけてくれることを望んだ。頭ごなしに禁止するよりも、子どもが自分でいけないことだと実感することが大事だから。ただ、あまりに続くようだったら禁止はしようと思っていた。ザリガニには申し訳ないが、命を通して子どもたちも何かを学んでいると思う。

また、遊んでいる子どもたちに何気なく声をかけたら遊びが終わってしまったなんて事もある。多分、幼稚園の先生なら経験したこともあると思う。どのようなタイミングで何を話すか…とても難しい事象だ。

気をつけていることは遊びに大人が答えを導き出さないこと。子どもたちが築いた遊びに、ついつい大人が知恵を与えてしまいたがる。すると「自分たちでやった遊び」から「大人に言われてできた遊び」になってしまう。

保育にも、禁止するやり方、子どもが気付くまで待つやり方…色々なやり方があるし、それが正解でも間違いでもないと思う。ただ、子どもが自己を発揮できる環境が少ない今の社会で、子どもを育てる一つのやり方としてプレーパークという存在があることを広く認知してもらいたい。